報告区分　1

気仙沼市大沢地区における住空間と生活行為に関する研究
－東日本大震災以前の住空間に関するヒアリング調査－

Research on Dwelling Space and a Living Life Behavior in Osawa Village of Kesennnuma City
- Hearing Investigation about Dwelling Space before Tohoku Earthquake -

○友渕貴之[*1]、槻橋修[*2]、小川紘司[*3]、小山駿介[*3]
TOMOBUCHI Takayuki, TSUKIHASHI Osamu, OGAWA Hiroshi, KOYAMA Shunsuke

The Osawa Village of Kesennuma City which suffered serious damage from Tohoku earthquake. In performing revial city planning, I think that it is necessary to grasp the dwelling space the living life behavior before Tohoku Earthquake. Then, the questionnaire and hearing about dwelling space or living life behavior were performed. In it , since the feature was looked at by space composition, dwelling space and living life behavior are considered according to composition. Moreover, the feature of the dwelling space in the Osawa Village is clarified by comparing also with the dwelling space of Tohoku with the past example of investigation.

キーワード：住宅，生活行為，集落，住空間
Keywords: Residence, Living Life Behavior, Village, Dwelling Space

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生し、地震・津浪等による被害を受けたことにより多くの地区において集団移転を行うことを余儀なくされている。それらの地域では集団移転を行うにあたり、震災以前の暮らしと大きく変化することが予想される。そこで、それぞれの地区において震災以前の住空間や生活行為を振り返ることにより、地区の復興において必要となる諸条件を導き出す必要があると考えられる。

本稿では、宮城県気仙沼市唐桑半島の根元に位置する大沢地区を対象とし、震災以前の住空間と生活行為に関する調査を行い、震災以前の住宅環境と住民の暮らし方を明らかにすることで、集団移転における住宅再建に関する有効な知見を深めていくことを目的とする。

1-2. 研究の位置づけ

東北地方における都市住居の間取りと変容に関しては、梅津ら[1)]が、アンケート調査を基に東北の都市部におけ

写真１　震災前の大沢地区　【2010.6】

写真２　震災後の大沢地区　国道から望む[2012.5]

写真３　震災後の大沢地区　山側から望む[2012.5]

*1　神戸大学大学院　博士課程後期研究生　Rechercher,Graduate School of Eng., Kobe Univ., M. Eng.
*2　神戸大学大学院工学研究科准教授・修士（工学）　Assoc. Prof., Graduate School of Eng., Kobe Univ., M. Eng
*3　神戸大学大学院　博士課程前期　Graduate Student,Graduate School of Eng., Kobe Univ.

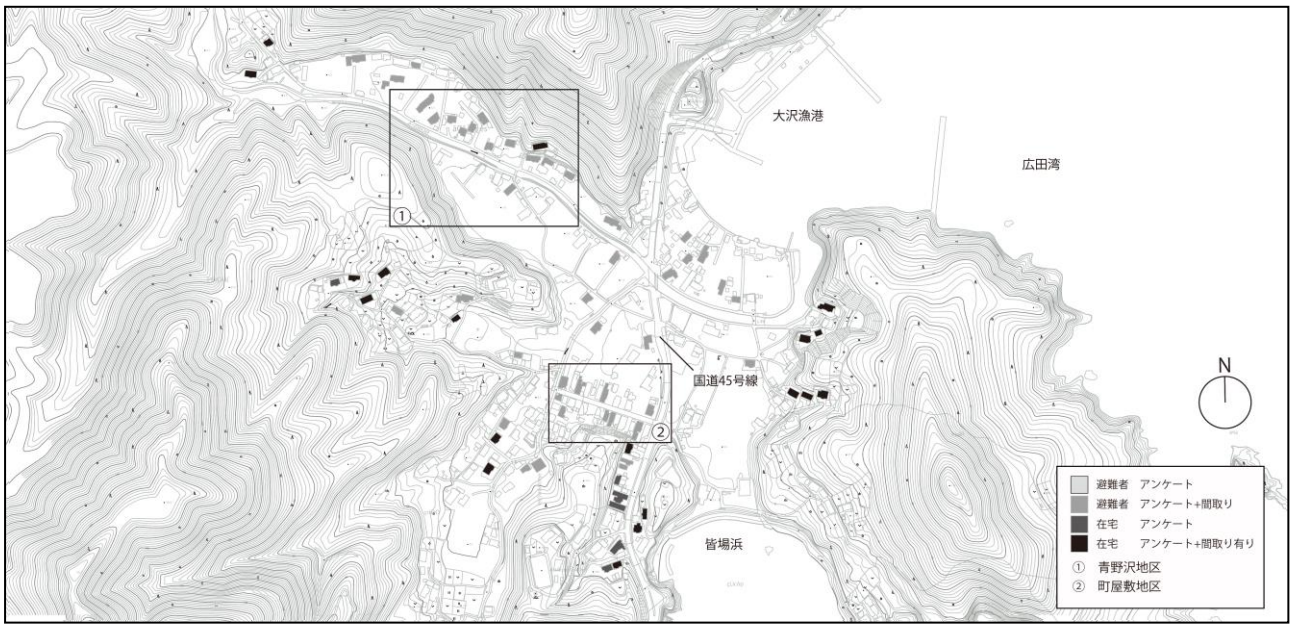

図１　大沢地区におけるアンケート実施済世帯、青野沢・町屋敷地区の図示

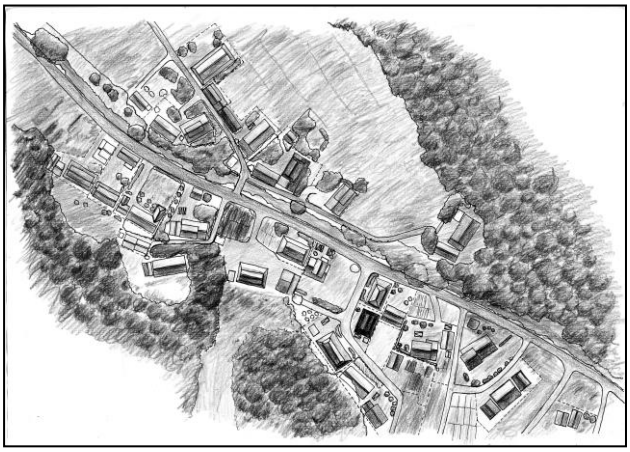

図２　青野沢付近の配置図（図１：①部分）

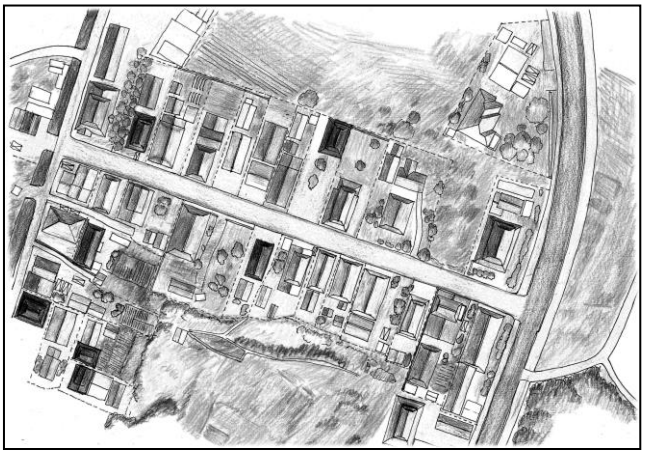

図３　町屋敷付近の配置図（図１：②部分）

る住空間の調査を行うことにより、住空間の変化を捉えているが、本研究では東北の集落部における住空間の調査を行うところに違いがある。小泉[2]らは居室数や使用状況、近隣との付き合いに関する調査から漁業地区の暮らしに関する考察を行っている。本研究においても同様に、住宅の間取りや生活行為に関するアンケート・ヒアリングを中心に調査を行っているが、空間構成と生活様式を中心に震災以前の住空間を明らかにするところにおいて異なる。また、本研究は震災以前の住空間と生活行為を明らかにすることにより、集団移転後の住宅再建に向けた知見を深めることを目的とし、震災前の記憶が薄れる前にヒアリング調査を行う必要がある。

1-3. 調査方法

本研究では、大沢地区集団移転事業期成同盟会の協力のもと、期成同盟会会員の 147 世帯を対象に住空間や生活行為に関するアンケート、震災以前の間取りと生活行為に関するヒアリングを行った結果、アンケート 91 件、間取りや生活行為に関するヒアリング 56 件※1 得られた。今回の調査では、間取りに関するヒアリングは震災により被災し住宅を失った方への調査を中心に行っていることもあり、基本的には家主等に記憶を基に書き起こして頂いたものである。また、現在も変わらず住宅に住まわれている方に関しても同様に図面を起こして頂くという形式を採っており、それらの図面を筆者らが整え、再度家主等に確認を行うという形式を採ることで精度を高めるよう努めた。次章以降これらから得られた情報を基に①住空間構成②生活行為に関する考察を行っていく。

2. 大沢地区の概要

気仙沼市大沢地区は宮城と岩手の境界、唐桑半島の根元に位置し広田湾に面する集落であり、定置網養殖やカツオ船の餌となるイワシの供給を中心とした地場産業が

行われていた。人口 664 人、住戸数 188 世帯という構成であったが、今回の震災により、全壊 138 戸、半壊 1 戸、一部破損 2 戸、被災なし 47 戸と地区全体の 75%が被災し、未だ 64 世帯が仮設住宅で生活を行っている。

住宅の特徴として、大沢地区の多くの世帯が広い庭や畑を有しており、宅地間の距離も適度に保たれてゆったりとした住空間が多く見られる（図 2）。

また、昭和 8 年の三陸地震津波の際に集団移転により町屋敷地区に移転が行われており、大沢地区の中でも少し敷地環境が異なる場所である（図 3）。本研究では、そうした差異に関して特筆はせずに全体の傾向として、大沢地区における住空間と生活行為に関する考察を行う。

3. 大沢地区の基本構成

アンケートを中心に大沢地区の基本情報を整理する。

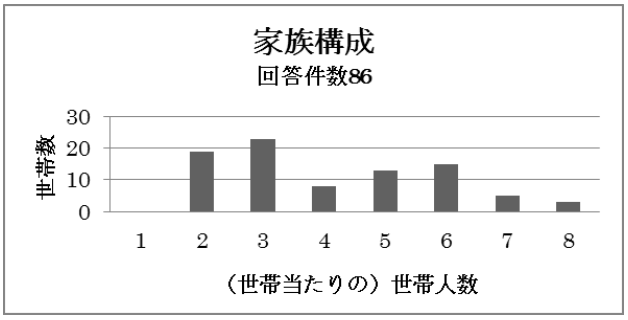

図４　家族の人数構成

大沢地区では、約 30%が 6 人以上で暮らしており、平均世帯人員は 4.1 人であるが、日本の平均世帯人員は 2.58 人[※2]と示されていることから大沢地区では、家族が集まって暮らす傾向にあると思われる（図４）。

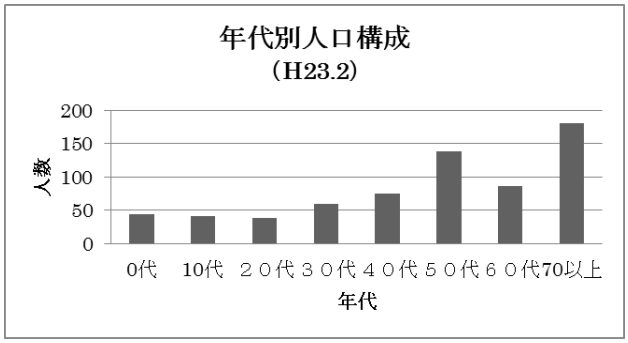

図５　大沢地区の年代構成（引用：気仙沼市役所）

年代別人口構成を見ると 60 代以上が約 40%と多い一方で 30 代までの各世代人口が 10%以下と非常に少なくなっており、内閣府の発表している 2010 年度 60 歳以上の割合は 31%[注2]であることからも、大沢地区では高齢化が進んでいることが分かる。

また、1 つの住宅における敷地面積は平均 170 坪と広い土地を有していたが、集団移転により与えられる平均

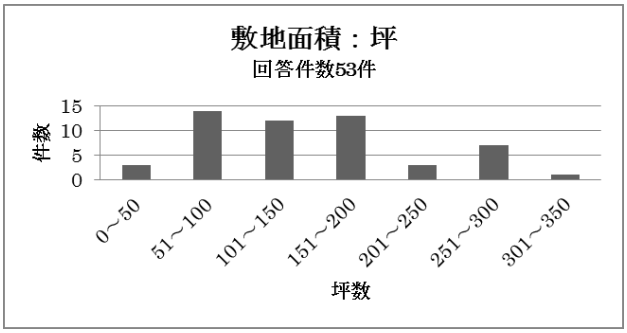

図６　敷地面積

敷地面積が 100 坪と大きく減少することから、住空間や生活行為が変化すると推察される（図６）。

4. 住宅の空間構成

4-1. 大沢地区における空間構成の特徴

住宅の空間構成を把握する上で間取りに関するヒアリングを行った（図７）。その中で、玄関回りの間取り構成について大きな特徴が見られたので以下に述べる。

大沢地区の間取り構成における特徴として、玄関回りの空間構成が大きく 3 種類の構成と 1 種類の変形により構成されていることが見られた。それをダイアグラムに示したのが図８である。玄関－茶の間型、玄関－廊下型、折衷型の 3 種類の空間構成に付随して、玄関－茶の間型と折衷型の玄関と部屋の間に縁側が挿入されている緩衝空間有りという構成の 5 種類が大沢地区における主な空間構成として存在していることが確認できた。

「玄関－茶の間型」は、玄関から茶の間を経由して他の部屋へと移動する形態であり、この空間構成ではほとんど廊下が無いのが特徴であるが、玄関－茶の間型・緩衝空間有りになると廊下が挿入されるようになる。

「玄関－廊下型」の空間構成は、玄関を入ると広い廊下がまっすぐと家の奥へと続き、その両側に部屋が配置されているのが特徴である。

「折衷型」の空間構成は、玄関が廊下と茶の間の両方に面しているという空間構成あり、大きな構成としては

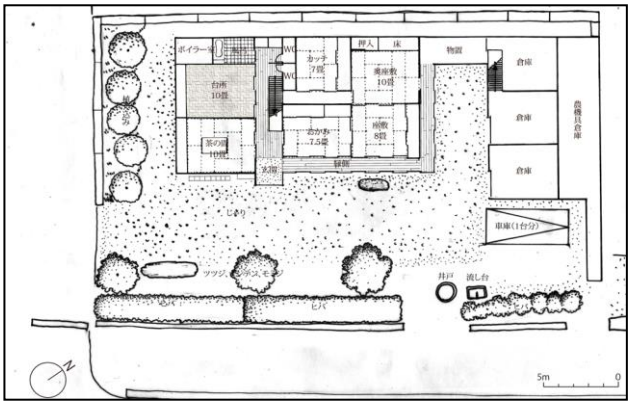

図７　ヒアリングによる住宅間取り図

玄関－廊下型に近い構成である。また、緩衝空間が挿入されると、玄関に面する部屋が茶の間からお上へと入れ替わる特徴が見られる。

ヒアリングの中で、玄関－茶の間型を大沢大工、玄関－廊下型を気仙大工が作っているという話も聞かれたが、詳細については明らかではないため、ここでは玄関－茶の間型、玄関－廊下型と呼ぶこととする。

また、これらの分類はヒアリング調査より導かれたものを筆者が独自に分類したものであるが、震災直前の間取りと生活行為の結びつきを把握する上で構成別に特徴を捉えていくことは有効な手法であると考え、構成別に特徴を整理していくこととする。

4－2. 構成別に見る特徴

ここでは構成別に住宅を構成する要素を比較していくことにより、構成による差異の有無について調査を行うと共に、梅津らによる東北の都市部における住宅構成と比較していくことにより都市部の住空間との差異についての考察を行うことで、大沢地区の住空間の特徴を明らかにしていく。またここでは、その他 2 件の構成を除く 56 件の住宅を対象に調査を行う。

（1）玄関回り構成と築年数

ヒアリングにより得られた情報を基に構成と築年数について考察を行う。玄関－茶の間型は 20 年～90 年の間に比較的均等に分布しており、51 年以前の住宅も多く見られる。一方、玄関－廊下型・折衷型は全て 50 年以内に建てられており平均築年数は 23 年・33 年と玄関－茶の間型と比べて新しい構成であると推察される（表１）。

こうしたことから、玄関－茶の間型の空間構成は他の構成と比べて古くから用いられている構成であり、時代の変遷と共に玄関－廊下型・折衷型が現れるようになったと考えられる。

また緩衝空間が有る例は少ないため正確な判断が難しいが、玄関－茶の間型・緩衝空間有りは 50～60 年の間に建設されていることから、緩衝空間を挿入する方法は玄関－茶の間型からの初期変形であると推察できる。

以上の事より、玄関－廊下型・折衷型の構成と梅津ら

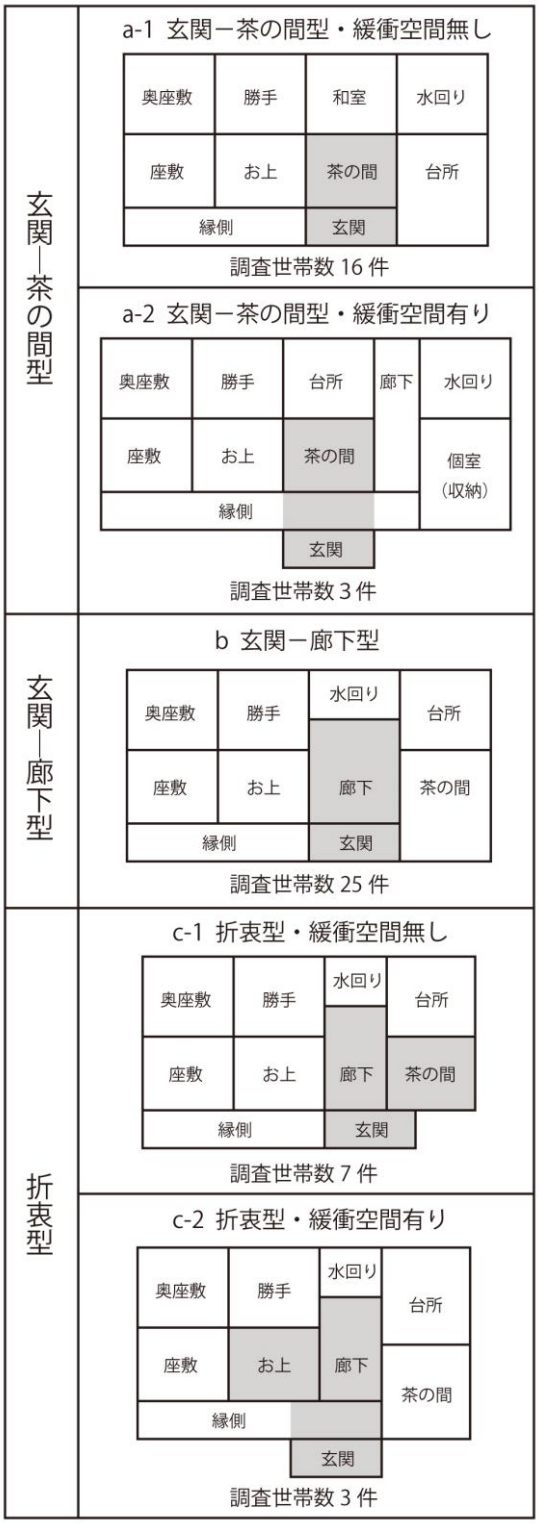

図８　玄関回りの構成ダイアグラム

表１　間取り構成別特徴：築年数

築年数		0～10	11～20	21～30	31～40	41～50	51～60	61～70	71～80	81～90	91～100	合計
玄関-茶の間型	a-1	0	0	3	2	3	4	2	0	1	0	15
	a-2	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	3
玄関－廊下型	b	5	4	11	2	1	0	0	0	0	0	23
折衷型	c-1	0	1	2	3	1	0	0	0	0	0	7
	c-2	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3
合計		7	7	16	8	5	5	2	0	1	0	51

の調査対象の住宅が同時期であり、玄関－茶の間型がそれ以前の例であることが分かる。

（２）居住室数

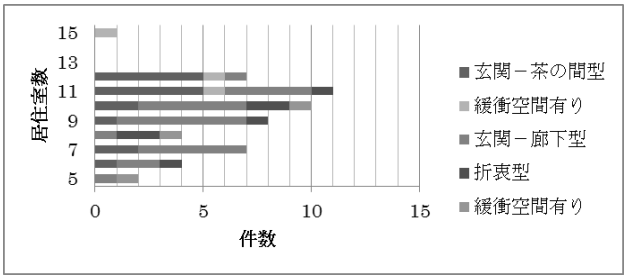

図９　構成別に見る居住室数

図９から全体として「11 部屋」が最も多く、次いで「10 部屋」となっているが、形態別に見ていくと玄関－茶の間型が「11 部屋」「12 部屋」を有している家が最も多くなっているのに対して、玄関－廊下型では、「9 部屋」が最も多く、「7 部屋・11 部屋」が 2 番目に多い。また、折衷型も「8 部屋・10 部屋」が最も多く居住室数が集まっていることから、微小ではあるが玄関－茶の間型の居住室数が多くなる傾向があると考えられる。

また梅津らの調査と比較すると、東北の都市部では「6 部屋」が最も多いと述べられており、大沢地区の居住室数は都市部より多く設えられていることが分かる。

（３）洋室の有無

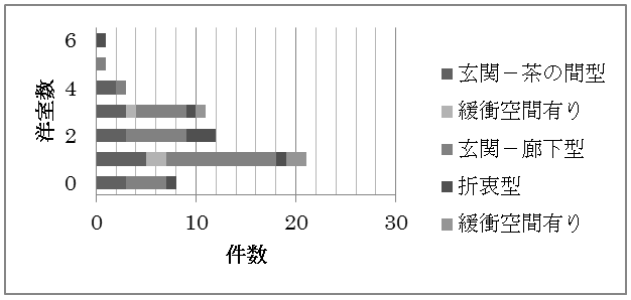

図１０　構成別に見る洋室数

次に、居住室を対象に洋室の室数（畳を敷いていない室）に注目し、生活様式の変化についての考察を行う。

洋室の数を見ていくと、「1 室」が最も多く、次いで「2 室」「3 室」となっており、洋室を設えていない住宅も 14%存在していることが分かる。

また洋室数に関してはそれぞれの空間構成による差異は見られず、梅津らの調査と比較すると洋室数「3 室」が最も多く、部屋の半数が洋室であることから新しい生活が定着していると述べられているが、大沢では洋室数「1 室」が最も多く、部屋の大半が和室であることからも従来型の生活が現在も根強く残っていると考えられる。

5. 住宅での生活行為

5－1. 生活様式

大沢地区における玄関回りの構成による空間の差異としては、築年数と居住室数に変化が見られたが洋室数に関しては見られなかった。また、東北の都市部と比較を行うことで大沢地区では、従来型の和室文化が根強く残っていることが把握された。続いて、実際の生活様式に関して検証を行う。

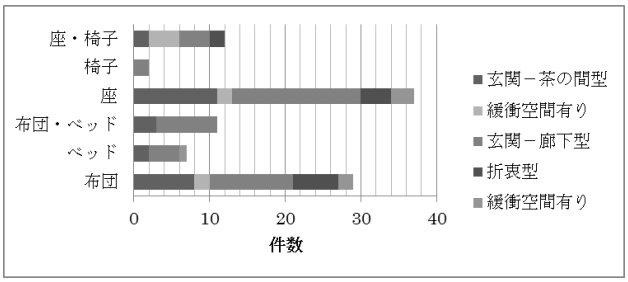

図１１　構成別に見る生活様式

生活様式を把握する上で、座式・椅子式、布団・ベッドのどちらを用いた生活を行っているかというアンケートを行った結果、全体では 60%以上の世帯が座敷・布団を使用する従来型の生活を行っていることが分かる。

構成別に比較を行うと、大きな差ではないが玄関－茶の間型が座式・布団と回答した割合が多くなる傾向が見られた。また、ヒアリングの中でほとんどの世帯の茶の間に堀コタツが設えていることが伺え、堀コタツを中心とした生活が大沢地区における生活様式として受け入れられていると推察される。

5－2. 内部空間の機能構成と生活行為

内部空間に関するヒアリングを行っていく中で見られた名称や使用機能が明確なものとして、①続き間空間であるお上・勝手・座敷・奥座敷、②訪問客用の茶の間、③生活空間である茶の間・台所・水回り・個室・収納空間、④店舗や内職の場としての仕事場、⑤緩衝空間である縁側・濡れ縁と大きく 5 つに分類することが出来る。

またヒアリングにより聞き取られた生活行為を大きく日常時と非日常時の生活行為に分類すると、日常時の生活行為として、家族団欒・食事・のんびり過ごす・近隣との交流・子供の遊び場・個室としての使用が見られ、非日常時の生活行為としては、訪問客をもてなす場所・正月に過ごす場所・冠婚葬祭時に使用する場・親戚や大人数の集まり時に使用するという行為が伺われた。これらの行為と部屋の関係性を（表２）にまとめた。

（１）日常時の生活行為

日常時の生活行為を見ていくと、家族団欒・食事・のんびり過ごす・近隣との交流など生活行為の多くを茶の

表２　空間と生活行為

	日常						非日常			
生活行為	家族団欒	食事	のんびり	近隣と交流	子供の遊び場	個室	訪問客	正月	冠婚葬祭	親戚・大人数の集まり
茶の間	◎	◎	◎	◎				○		
茶の間2				○			○			
台所		○	○	○						
続き間					○	◎	○	○	○	○
和洋室						◎	○			
緩衝空間		○	○	○						

◎ よく使用する ○使用する

間で営んでおり、「一日のほとんどをここで過ごしている」「寝るまでみんなで過ごしている」と家族の生活の中心の場となっていることが分かる。また、近隣の方など顔の知れた方々も茶の間に通してお茶会や団欒を行っていることが伺われた。緩衝空間においても同様に食事・のんびり過ごす・近隣との交流などの生活行為が行われているが、ここでは主にひなたぼっこや盆栽など生活の一休みの場や畑作業などの合間の安らぎの場として使用されている。

（２）非日常時の生活行為

一方、近隣住民以外の訪問者を接待する場としては茶の間を用いず、家族が使用しない第２の茶の間や続き間など日常生活で使用しない空間を用いる。また、正月に過ごす場所・冠婚葬祭時・親戚や大人数の集まりなど、人が集まる行為や特別な行為を行う際には続き間を繋げて使われているが例は少なく、続き間の多くが個室や空室として使用されている例が多い。

以上の事から、部屋数は都市部に比べて多く設えられているが、日常生活は茶の間を中心に限られた空間で行われており、行事や大人数の集まり・訪問客を接する場など非日常時の行為のための空間を設えることが、一つの様式として受け継がれていると推察される。

6. まとめ

6－1. 大沢地区における住空間構成による差異

大沢地区では玄関回りの空間構成は主に３種類の分類と１種類の変形により、5 種類の構成が見られる。また、構成別に住宅の築年数を比較すると玄関－茶の間型においては築 20 年～90 年の間に分布しているのに対して、玄関－廊下型、折衷型は築 50 年以内に分布し、かつ築 20 年～30 年の間に多くの住宅が建築されていることから、玄関－茶の間型の方が古い空間構成であり、時代の変遷と共に玄関－廊下型、折衷型が現れ始めたと考えられる。また、玄関と部屋の間に緩衝空間を挿入する手法に関しても玄関－廊下型、折衷型よりも古い築年数のものが見られることから、玄関－茶の間型と同様に古くから用いられている手法であると考えられる。

また、玄関回りの空間構成別に住空間の差異について調査を行う中で①居住室数の差異②生活様式による差異が見られた。居住室数に関しては、玄関－茶の間型が他の構成と比べて部屋数が多くなる傾向にあり、生活様式に関しては玄関－茶の間型が他の構成よりも座式・布団を中心とした従来型の生活を営んでいる世帯が多いことが明らかとなった。

6－2. 東北の都市部における住空間との差異

梅津らの調査と比較・考察を行う中で、都市部では居住室数は「6 部屋」と少なく、洋室が部屋の半数を占めているのに対して、大沢地区では居住室数が「11 部屋」と倍近くの部屋を設えているにも関わらず、洋室がほとんど見られないことから同じ東北地方でも都市部と集落部では空間構成や生活様式が異なり、大沢地区においては、従来型の住空間と生活様式が今もなお残っていることが明らかとなった。

6－3. 空間と生活行為

大沢地区では、茶の間を中心に日常生活が行われており、非日常時の生活行為は続き間や第２の茶の間など日常時に使用しない空間を使用することで、生活行為が交わらないように生活が営まれていることがヒアリングにより伺われた。

本研究により、同じ東北地方でも都市部と集落では住空間が異なることに加えて、集落内でも幾つかの住空間や生活行為に関する特徴が伺えたことからも、集落を再建するにあたり以前の住空間や生活行為を把握し、暮らし方に考慮した計画を行う必要があると考える。

＜参考文献＞
１）　梅津光男、佐々木嘉彦、戸部栄一、藤田一枝、東北地方における都市住居の構えかたとその変容に関する研究（その１）、日本建築学会東北支部研究報告集、第 51 号、pp81-84、1988
２）　小泉正太郎、三国政勝、漁業地区における住居及び近隣の空間形成に関する研究：その１千葉県勝山漁業集落の調査を通して、日本建築学会論文報告集、第 312 号、pp123-132、1982

＜注＞
※１　2013 年 5 月 7 日～14 日に大沢地区集団移転促進事業期成同盟会会員を対象にアンケート・ヒアリング実施
※２　厚生労働省による 2011 年度の平均世帯人数